

《書評》

『大学生・社会人のためのイスラーム講座』

小杉泰\*・黒田賢治\*\*・二ツ山達朗\*\*\*編、ナカニシヤ出版、2018年

赤堀雅幸†

「本書は、現代的な変化に着目したイスラームの概説書であり、大学生や社会人の教養としてイスラームを学ぶことを目的としている」と第1章は述べる(3頁)。それは「入門書と専門書との間にあるような、幅広いトピックを扱いつつ現代のイスラームについて大学生や社会人が教養として学べるような書籍」と「あとがき」で言い換えられる(270頁)。

この目的のために、本書はそれぞれ15頁ほどの長さの本章15章と、第15章以外の各章末に置かれた1～2頁の14本のコラム、末尾の「あとがき」と簡単な索引、著者紹介からなる構成をとり、各章、コラムの著者は総勢25名に及ぶ。本稿では個々の論考に立ち入って論ずる紙数はないので、論集としての構成や特徴を中心に評することとする。

各章の章題は下記の通りである(副題省略)。コラムの表題については残念だが省略する。

第1章 イスラームの学び方	第9章 イスラーム金融
第2章 日本とイスラーム	第10章 ハラルな飲食品とハラル認証
第3章 イスラーム復興	第11章 知と権力
第4章 ムスリムにとってのイスラーム史	第12章 ジェンダーから考えるイスラーム
第5章 聖典クルアーン	第13章 イスラーム主義
第6章 法学・神学	第14章 世俗主義とイスラーム
第7章 スーフイズム・タリーカ・聖者信仰	第15章 多文化主義とイスラーム
第8章 イスラームと芸術	

各章の主題が現代のイスラーム、あるいは現代とイスラームに関わる重要なことがらを取り上げていることは間違いがない。とりわけ、ムスリム自身によるイスラーム史の表象化をめぐる第4章や、アサド(2006)の『世俗の形成』に依拠しつつ世俗主義と宗教の関係を整理し、むしろ世俗主義について再考を求める第14章などを盛り込んだのは、現代イスラーム理解に向けた概説書として

\* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構教授

\*\* 国立民族学博物館現代中東地域研究拠点特任助教

\*\*\* 香川大学経済学部准教授

† 上智大学総合グローバル学部教授

akahori@sophia.ac.jp

は斬新で有用であろう。これ以外にも近代がイスラームの変容とどのように関わったのか、さらにその関わりが今日にいたってどう展開しているのかを論じた章は多く、その意味ではイスラームの概説書というに限らず、近代と宗教の関わりを考えさせてくれる論集としての意義も本書には認められる。

もちろん、研究蓄積の進む宗教観光に関する章や、「アラブの春」がイスラームとの関わりではどのように捉えられるかを論じた章、このところ注目が高まっている宗派間関係の現在を（コラム13で短く取り上げられているが）取り上げる章を設けることもありえただろう。私自身の関心からいえば、世界各地で宗教的マイノリティとして生きるムスリムについて、一つの章でまとめて論じるというのもおもしろかったように思われる。

しかし、現代イスラームをめぐる多種多様な主題を余さず取り上げることは不可能であり、本書の帯の煽りが述べる「総合的に学べる」が大げさなのであって（加えて言えば帯の「イスラームを知らずに教養人は名乗れない」は大げさを超えて品がない）、一定のバランスをとって多彩な主題設定をしている論集として、本書は高く評価できる。それが示しているのは、多角的な視点から対象に迫ることが、現代イスラームの理解に不可欠であるという認識であり、そのための一步を踏み出すきっかけを与えることに本書の価値はある。

他方、それら多種多様な論考を論集として配列し、秩序化して提示するという観点からすると、本書の構成には別の組み方もあったように思われる。第1章で章の配列の意図（12-18頁）は説明され、章から章へのつながりは一通り示されているが、これを繰り返し読んでも、全体の構成はあまり明確にはみえてこない。実際に読み通してみても、第2章から第4章への展開がどういうつながりなのかは判然としないし、第8章、第12章がなぜそこに置かれるのかもよくわからない。

本書と同様に若手研究者が多数執筆陣に加わった私市・浜中・横田編（2017）の『中東・イスラーム研究概説』の章立てが便宜的で、その分取まりはよいのに比べれば、章と章のつながりを重視した本書は、部分的に取り出して読むのではなく、全体を読み通すことに意味を見出せる点が好ましいが、構成についてはさらに練る余地があると思わせる。各章末に置かれたコラムをみても、それ自体は興味深い小論である場合が大多数だが、章との対応がよくわからないもの（たとえばコラム12や14）もあり、ちぐはぐな印象がぬぐえない。もちろん、論集の全体を整合的に構成するのは実はたいへんな作業であり、現行の構成でも編者や執筆者の苦勞のほどが偲ばれるだけに、さらに高い水準を求めることは酷かもしれない。

また、各章の書きぶりについても、概説的な展開のなかに適宜事例を散りばめているものと、著者自身の専門とすることがらの議論が中核をなし、最初と最後に一般化への契機を示すもの（とくに第8章、第12章）が入り交じっており、これも概説書として通しで読む者からすると、どのように読み取っていくかをむずかしくさせている。入門書と専門書の間という点でも、章によってどちらに傾くかにおれがあり、現在の平均的な大学生を思い浮かべれば、（編者自身も意識しているようだが（3頁））教科書として教員のサポートを受けながら利用するのが適切な場合も想定できそうである。加えて、全体としてはイスラームについて肯定的な扱いに傾いていることは否定できず（とくに第9章）、その点で、イスラーム脅威論を念頭に置いて本書を手にとった読者が、礼賛か嫌悪かの二分法を抜け出す手助けとなるには、語り口は不十分であるように思われる。

現代のイスラームを多角的に論じる意義とむずかしさを示してくれる以外に、本書で注目すべきは、すでに触れたように執筆陣の大半が若手の研究者によって占められている点である。第8章、第

9章、第10章のように本書の執筆者たちによって開拓された新たな題材が概説書の一部として示されたことの意義は大きく、すでに蓄積のある対象についても新鮮な視点からの議論がなされていることは、得がたい本書の特徴である。

もちろん、若い著者が書くから、それだけですばらしいということにはならない。評者が執筆陣の若さに注目するのは、編者のいう「勢いのある」(270頁)という点を超えて、明言されていないもう一つの特徴と若さが結びついているからである。それは、「人類学」という分野を専門とする研究者が、執筆陣の過半を占めているという事実である。これは何も、私自身が人類学者だからではない(多少はそうかもしれない)。現在の50代より上の年齢には、イスラームについて研究するのに、人類学を主要な手法としている研究者が(日本ではとくに)少ない。そのことを踏まえれば、ようやくイスラームの人類学的研究に取り組む者の数がふえたからこそ、本書のような論集が成立することとなったと評者には思われる。

過去において、日本のイスラーム研究を主として担ってきたのは歴史学と思想研究であり、近年においては政治的イスラームを対象とする研究が盛んに行われてきた。それらの学問によって人類学の成果が参照される機会はかなり限られてきたが、人類学それ自体には、イスラームをどのように理解するのかという問題設定が古くから存在してきた。

人類学のイスラーム理解は、多種多様な人々の営みが複雑に絡まり合った結果として、一般的には宗教、特異的にはイスラームをどのように捉えるかという視点に立ってきた。そこにあるのは本質主義でも構築主義でもなく、その狭間を探求しようとする姿勢であり、日本においてはたとえば大塚(1989)の論集が古典として挙げられようし、また同時期に発表されたアサドの論考(Asad, 1986)は今日もなお大きな影響力をもっている。

本書の編者も「あとがき」で、単純であるがゆえに強力な説得力を持つ本質主義的なイスラーム理解への警戒を明らかにしており(271頁)、それはまさに人類学の目指すところと重なる。もちろん、思想研究に関しても、イスラームの思想的多様性のもとより、思想が今を生きるムスリムの暮らしとどのように関わり合っていくかにも目は向けられつつあり、歴史学もまた同様である。あるいは、人類学と並んで「地域研究」が本書執筆陣の専門として挙げられていることに注目すれば、日本で20世紀末から取り込まれてきたイスラームに関する地域研究の推進が、研究拠点形成という制度的な目標などより、諸分野の協働の促進と学横断的な視点を持つ研究者の登場に与るところがあったことの証左として、本書をみることもできるかもしれない。

過去に著され、多くの著者が寄稿してイスラームの多彩な側面を描き出そうとした概説書としては、板垣監修、山岸・飯塚編(1998)、後藤・山内編(2003)、小杉・江川編(2006)などの論集が直ちに思い浮かぶ。しかし、それらの刊行からかなりの年月が過ぎただけでなく、個々の論考の充実という点において、本書は群を抜いている。評者は本書が版を重ね、また何らかの形で内容が拡充されていくことを期待する。そして、いささか先走った話かもしれないが、最新のイスラーム関連の辞典(大塚・小杉・小松・東長・羽田・山内, 2002)の刊行から18年、最新の研究案内(小杉・林・東長, 2008)の刊行から10年以上が過ぎたことを思えば、本書執筆陣のさらなる研究の充実と学的共同体への貢献にそれ以上に大きな期待を寄せたくなるのである。

#### 参考文献

アサド, タラル(2006)『世俗の形成: キリスト教, イスラム, 近代』中村圭志訳, みすず書房。

板垣雄三監修，山岸智子・飯塚正人編（1998）『イスラーム世界がよくわかる Q&A100：人々の暮らし・経済・社会』亜紀書房。

大塚和夫（1989）『異文化としてのイスラーム：社会人類学的視点から』同文館。

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編（2002）『岩波 イスラーム辞典』岩波書店。

私市正年・浜中新吾・横田貴之編（2017）『中東・イスラーム研究概説：政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』明石書店。

小杉泰・江川ひかり編（2006）『イスラーム：社会生活・思想・歴史』新曜社。

小杉泰・林佳世子・東長靖編（2008）『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会。

後藤明・山内昌之編（2003）『イスラームとは何か』新書館。

Asad, Talal, 1986, *The Idea of an Anthropology of Islam*, New York: Center for Contemporary Arab Studies, Georgetown University.